

多摩川（福生市域内）の野鳥概観

桜岡 幸治

はじめに

近頃では、探鳥（バードウォッチング）という言葉や趣味もすっかり世の中に定着し、一般的なものとなりました。（因みに、探鳥という言葉は日本野鳥の会の創立者である故中西悟堂氏による造語です。）一五・六年程前までは双眼鏡や望遠鏡で鳥を見ていると、周囲の人から好奇の目で見られ、それこそ逆にこちらが観察されるなどということもありました。私も人家近くで双眼鏡を覗いていたところ、挙動不審のかどで一〇番され、パトカーで駆け付けた警察官に職務質問されたという、今からみれば楽しい（？）経験をしたこともあります。それが最近では、双眼鏡で鳥を見ていると、「何か珍しい鳥でもいるのですか？」と、先方から声をかけられる事が多くなりました。それだけ、鳥をはじめとする自然環境に人々の注意が向けられるよう

になってきたのでしよう。

この探鳥という楽しみの対象となっている野鳥の種類ですが、現在、世界中で約八六〇〇種の鳥が知られています。「約」とつくのは、種の分類の仕方が学者により多少異なる為です。このうち、日本では過去に五二五種類の野鳥が記録されています。この五二五種の中には、残念ながら既に日本では絶滅したとされる、リュウキュウカラスバトやオガサワラマシコ、あるいは絶滅寸前のトキ等も含まれています。

そして、これらの鳥は地球上のそれこそありとあらゆる環境——砂漠、極地、森林、市街地、にその生活の場を持っています。これは日本というレベルで考えても、あるいはもっと狭く、福生市内というレベルで考えてもそうなのです。場所により、季節により、鳥達はいろいろな姿を私達に見せてくれます。私達のごく身近な場所でも、意外に

たくさん野鳥に接することができます。福生市内にもそんな場所があるので。

都市化の進む街

福生市は東京都の西部、都心から約四〇平方キロメートル程離れた所に位置しています。面積が一〇・二四平方キロメートルですから、そんなに広い市域ではありません。地域の標高の最高地点が一四三・五メートル、最低地点が九七・五メートルとされていますから、ほぼ平坦な場所といえるでしょう。おそらく昔は、武蔵野の雑木林や野原や畑といった、のどかな田園風景の拡がるころだったのではないかと、想像されます。ところが、福生市は都心に比較的近く、地形も平坦なことから、近年、都心部のベッドタウンとしての機能が注目され、住宅地、繁華街、工場群などの都市化整備が進んできました。

一般的にある地域の都市化が進み、人工的な環境が多くなると、そこに住む野鳥の数は減少します。これは野鳥だけではなく、多くの野生生物に共通していえることです。野生生物の大半は、人工的な環境よりも自然環境に依存して生活しているので、無理からぬ結果ということになります。都市近郊の農村部でも、年間を通せば五、六〇種程度の野鳥は観察されるのですが、これが例えば、福生駅前の繁華街ではどうでしょうか。年間を通して、せいぜい

一〇数種までの野鳥が観察されるだけでしょう。(ここで最近注目されることは、この環境の都市化に逆に適応してしたたかにその勢力を拡大している鳥達——ヒヨドリ、コガラ、キジバト等、がいるということです。)

ところで、野鳥をその住んでいる(営巣している)という方がよいかも知れませんが)環境によって、「山野の鳥」、「水辺の鳥」というように分けることがあります。これはごく大雑把な便宜的な分け方であって、分けるに際しての明確な基準はありません。例えば、シジュウカラやウグイスのように、主に森や林を生活の場に行っている鳥であれば、「山野の鳥」(陸鳥ということもあります)、シギやチドリ、あるいはカモの仲間のように水辺を生活の場に行っている鳥であれば「水辺の鳥」(水鳥ということもあります)という程度の分け方です。両方の環境にまたがって生活している鳥もたくさんいます。

福生市はもととが平坦な地域で、山や丘陵といえるものはありませんでした。林や野原の広がる田園地帯は都市化が進み、「山野」を生活の中心に据える鳥達にとっては住み難い場所となりつつあります。そこでもう一方の環境、水辺環境に目を向けてみるとどうでしょうか。福生市には多摩川の流れがあるので。

多摩川

多摩川は、奥秩父地域の笠取山を水源として、奥多摩の山間地を流れ、東京の西部を縦断し、東京都と神奈川県の間、羽田空港付近で東京湾に注ぐ、延長一二八キロメートルの東京を代表する一級河川です。

福生市の多摩川は、地域の西端をほぼ北から南へと流れています。多摩川全体から見ると、中流部の上流という位置に相当します。

多摩川は、上流、中流、下流と下るに従い、その場所、場所環境を次々に変えていきます。そして、それに伴ってそこに生活している鳥の種類も変化していきます。一般的に河原（水辺）の鳥の種類は、上流よりも、中流下流にかけて増加していきます。もちろん、多摩川にもこの傾向があります。

いろいろな条件の河原で鳥を見てゆくと、鳥の多い河原の条件というものがあることに気がつきます。それがどのようなものなのか？ その幾つかを挙げてみましょう。

- ・ 川幅が広く、流れが緩やかなこと。もちろん、水がきれいであることも必要。
- ・ 広い河原があり、アシ原や草叢が発達していること。
- ・ 河原に低木林や疎林があること。
- ・ 河原の背後に畑や水田があること。

これらの条件が整っていると、その河原ではまず間違いないとよいくらいにたくさん鳥が生活している筈です。そして、これらの特徴は河原の中流域の特徴でもあります。市内の五日市線鉄橋の辺りから河原沿いに下流の南公園付近まで、多摩川の対岸やこちら側を眺めながら歩いてみて下さい。きっと「鳥のたくさん住んでいそうな光景」が見られると思います。多摩川の場合、前記のような状態の河原が見られるのは、羽村堰よりも下流の部分になります。青梅より上流では川幅も狭く、流れも急になり、水際からすぐに山の斜面が立上る為、いわゆる「水辺の鳥」にとってあまり快適な場所ではなくなってしまいます。

生物と環境との間には、切っても切れない不可分の関係があります。生物は自分達が最も暮らしやすい場所（例えば、食物や水が豊富で、繁殖し易く、安心して休める場所）を選び、そこを生活の場とするからです。多摩川の河川敷には、流水、小池、河原、アシ原、疎林等の小環境が重なり合うようにして存在しています。これらの小環境がたくさんある場所ほど、たくさん鳥の生物が自分達に合った場所を選好し生きてゆけるという訳です。

中流下流にかけての流れの緩やかになった水面ではカモが休み、サギの仲間が魚を狙います。浅い水際では、シギやチドリが水生昆虫や上流から流れ着いたエサを探し、河原の草叢ではヒバリが卵を抱きます。広いアシ原の中に

は、オオヨシキリやヒクイナやバンが隠れ、ヤナギの仲間やニセアカシアの作る低木林にはホオジロやカワラヒワ、といった具合に、鳥達も実に無駄なく河原の環境を利用してきます。特に、明るい林の発達した河原は、水辺の鳥だけでなく、山野の鳥までをも収容できる魅力的な場所となっています。

多摩川の鳥

多摩川の河原を歩くと、四季折々に応じた野鳥を観察することが出来ます。鳥の中には季節により、その生活場所を変えるものがあるからなのですが、季節による移動のタイプで鳥を次のように分けることが出来ます。

留鳥・・ある地域で一年中生活している鳥。

スズメ、ヒヨドリ、キジバト等。

漂鳥・・日本国内を季節により移動する鳥。

アオジ、ルリビタキ等。

夏鳥・・春、南の地域から日本に渡来して繁殖し、秋、南の地域に渡去する鳥。

ツバメ、オオヨシキリ等。

冬鳥・・秋、北の地域から日本に渡来して越冬し、春、北の地域に帰り繁殖する鳥。ツグミ、ジョウビタキ等。

旅鳥・・日本より北の地域で繁殖し、日本より南の地域で越冬する鳥。日本には、春と秋の移動の時期に立ち寄る。

トウネン、オバシギ等のシギ・チドリの仲間。

迷鳥・・本来、その地域にはいない鳥が、台風等で運ばれてきたもの。

では、実際に多摩川の河原ではこうした野鳥達が何種類程度見られるのでしょうか。ある地域で、過去に観察された野鳥の記録をまとめたものを「鳥類目録」と呼んでいます。鳥類目録を作成するには、できるだけ多くの人や資料からの記録を集める必要があります。ここでは取り敢えず、私の手元にある記録から、福生市内の多摩川の河原とその周辺（上、下流部）で認められた野鳥を抜き出してみました。（付表参照）

そうしますと、多摩川の河川敷では、約一〇〇種類の野鳥が確認されることとなります。他の観察者の記録を集めれば、この数はもっと多くなる筈です。

多摩川の鳥といいますが、この中には「水辺の鳥」だけではなく「山野の鳥」もかなり含まれています。ということは、福生市内で見られる鳥の大半は、この多摩川筋で見ることができると言ってもよさそうです。都市化の進む福生市において、多摩川の河川敷が鳥達にとって、如何に

貴重な場所であるかということが解りません。もし、この部分の環境が破壊されたとしたら、福生市の鳥相（野鳥の種類構成や数の変化）はごく貧しいものになってしまう可能性が大きいと言えます。

付表の野鳥の一覧表を見ながら、福生市の多摩川を特徴づけるような鳥、あるいは特記されるべき鳥がないかどうかみてみましょう。

まず、ワシタカ目・ワシタカ科のオジロワシが観察されたことがあります。この鳥は国の天然記念物に指定されている貴重種です。ただ確認されたことがあるといっても、かなり以前、一九八〇年一月の記録です。この年、狭山湖でも観察されたという話を聞きましたが、たぶん同じ個体ではなからうかと思えます。北海道の一部では繁殖しており、東北地方や北陸地方に越冬の為、移動することが知られています。多摩川のこの辺りではごく稀な、迷鳥的な記録です。

代表的な水鳥であるカモ類は一種が観察され、皇居のお濠で有名になったカルガモを除き全てが冬鳥です。多摩川畔にある南公園の下流で、多摩川に秋川が合流するのですが、この合流点には多摩川を横断するような形で昭和用水堰の堰堤が設けられています。一〇年程前までは、この堰堤に多摩川と秋川の水が堰止められて、合流点は大きな

池になっていました。冬になると、この池には数えるのに困るぐらいのカモ達が渡来し、多摩地区では狭山湖・多摩湖の次にカモの多い所として知られていました。ところがその後、この広い池は多摩川が増水する毎に上流から運ばれてきた土砂で埋まり、現在ではとても池と呼べない状態になってしまいました。それに伴いカモの数も著しく減少し、現在ではごく少数が冬期に渡来するのみです。

シギ・チドリの仲間は一六種。イカルチドリとイソシギを除き、他は全て、春と秋に通過するだけの旅鳥、ないしは冬鳥です。東京湾岸のある干潟では四〇種以上のシギ・チドリの仲間が確認されているのに比べると、少ない種類数です。というよりも、この仲間はずっと河川の上中流域では少ない鳥達です。シギ・チドリが渡りの途中に立ち寄るのは主に海岸部の干潟で、多摩川の河口部にある干潟も毎年、春と秋に多数のシギ・チドリが翼を休めていく場所として知られています。やはり、河川中流域の砂利の河原よりも、河口部の砂泥質の干潟の方がエサも採り易いし、その量も多いでしょう。もともと、シギ・チドリが渡りの中継地として利用することの少ない中流域とはいえ、春（四月中旬～五月上旬）と秋（九月上旬～下旬）の渡りのシーズンに多摩川のこの辺りを歩くと、きつとたくさん来ているに相違ないという独り勝手な期待感にワクワクしながら、浅瀬や水際を丹念に調べる羽目になります。

初夏～夏にかけてのアシ原や草叢では、オオヨシキリやセッカなどの草原性の鳥が繁殖します。湿地帯を好むヒクイナ、ヨシゴイ、バンも今では数の少なくなった鳥です。河原に広がるアシ原や草叢は、夏期、草原性あるいは湿地性の鳥達の営巣地として大事であるばかりではなく、冬にはたくさんの種子を残しますので、ホオジロ、カシラダカ、カワラヒワなどの格好の冬のエサ場ともなります。昔は普通に見かけたヒバリも、広い田畑の少なくなった今では、河原がその重要な生活場所になっています。川の中流域では、ごく普通に見られるアシ原や草叢も、鳥達の生活にとってはなくてはならない場所です。

色彩の鮮やかなことでよく知られたカワセミは、市内の多摩川では四季を通じ、幸いに珍しくなく観察することができます。そして、この鳥は水辺の環境のパロメーターであるといわれます。それは、カワセミが小魚を主食としているために、魚のたくさん住める清流がその存在に欠かせない条件だからです。では、カワセミの生活できる場所は、汚染されていないきれいな環境といえるか、というと単純にそうでもないことが最近解ってきました。まず、東京都内におけるカワセミの分布の変化をみましょう。カワセミは一九六〇年頃までは都心部の池や水辺でも頻繁に観察されてきました。ところが、一九六四年の東京オリンピック以後、高度経済成長とともに、その生息域は東京の西

へ西へと追いつめられていったのです。そして、一九七〇年には福生付近より下流の多摩川ではその姿を消した、といわれるようになりました。一時は個体数そのものもかなり減少し、その存在もどうなることかと危ぶまれたのですが、一九七〇年代の中頃になると、今度は逆に勢力を盛り返し、その生息域を東へと広げだしたのです。そして、とうとう一九八五年には、再び都区内での繁殖が確認されるようになりました。このカワセミの分布の消長を調べると、生物と環境との面白い関係が解ります。まず、一九六〇年代の後半より、カワセミの分布域が西へ後退した理由として、水質汚染によりエサとなる魚が減少したこと、河川の水辺環境の荒廃、営巣地（水辺の土の岸）が失なわれたこと、等が挙げられています。では一九七〇年代の後半に、カワセミの分布域が東へと拡大したのは、上記の問題が根本的に解決されたからかというところ、そうでもないようなのです。（確かに、農業や排水規制の強化により、多摩川の水質は改善されてはいるのでしょうが）カワセミ復活の原因として考えられているのは、水質汚染に強いモツゴという魚が増え、これがカワセミのエサとなっている、水辺よりかなり離れた場所にも営巣するようになった、人をあまり恐れなくなった、等のことです。つまり「清流のシンボル」とされてきたカワセミが、ある程度汚染された環境でも生活できるような適応力を身につけた結果、その生

息域を拡げることができたというわけです。ひと頃、市内の多摩川でも珍しい鳥といわれ、探鳥会などでは必死になって探したこともありました。それが今では、いつでもとってよいくらいに姿を見ることができるようになりました。ただし、だからといって、多摩川の水辺環境が良好になったと考えるのは、早計に過ぎるのかも知れません。

不安定な環境

福生市の鳥達にとって、大事な生活場所である多摩川の河原ですが、この河原という環境は決して安定した環境ではありません。一度多摩川が増水すれば、河原の植生は全て根こそぎ流され、あるいは上流から運ばれてきた土砂に埋められてしまいます。川の流路が全く変わってしまうことも珍しくありません。増水後の河原を訪れてみますと、その変わりようをまざまざと目にするができます。自分達の生活の場そのものが、それこそあつと言う間に失なわれてしまうのですから、生物達にとっては死活に関わる環境の変化です。

雨の少ない夏には、多摩川の流路も細くなり、河原は極端に乾燥します。素足で歩くと火傷をするかと思うくらいに熱くなった石の敷き詰められた河原が、生物達の住み家となります。

更に、自然の力による変化ばかりが、環境の変化ではあ

りません。人間活動による環境の変化は、自然の力による変化以上に重大な影響を生物達に及ぼす場合があります。

南公園の下流、多摩川と秋川の合流点の秋川市側は、以前、湿地状のアシ原が広がっている場所でした。このアシ原の中を歩くと、ヨシゴイが飛び立ったり、カイツブリの丸い卵を乗せた浮巢が間近に見られたりと、楽しいことがたくさんありました。ところが、この場所にモトクロスを楽しむ人達がバイクを乗り入れるようになると、アシ原はたちまち裸地化し、バイクの騒音とも相まって、とても鳥達が生活できるような場所ではなくなっていました。バイクだけではなく、河原で4WD車を乗り回す人達も増え、河原の荒廃が問題になります。

広い面積の確保できる河川敷は、グラウンドや公園として利用され易い場所でもあります。アシ原も草叢も、ブルドーザーを使えば、またたく間に真平らな、整地された場所に変えられてしまいます。人が自然の中で健康を維持し、自然の空気を思う存分に吸おうという施設をつくる為に、本来そこにあった自然が破壊され、なおかつ、多くの野鳥がその住み家を追われてしまうことになりました。

多摩川の水質にも考えさせられるものがあります。上流から流れてきた多摩川の水は、福生市の上流にある羽村堰でそのほとんどが、玉川上水へと導かれてしまいます。羽村堰より下流へ流れてくる多摩川の水は、ごく僅かな量に

しか過ぎません。ところが、羽村堰より五〇〇メートル程下流の地点で、多量の都市下水が流量の少なくなった多摩川に流入しているのです。その為、この地点より下流の水の汚染度はかなりのものとなり、一時期、多摩川全体の中でも有数の汚染区域だったことがあります。この状態は平井川や秋川が多摩川に合流し、その汚れが薄められるまで続くこととなります。この汚れた水の中で、セキレイはエサを拾い、コサギは魚を追っているのです。

鳥の住める環境

多摩川の河川敷では四季を通じ、一〇〇種類程の野鳥を観察することができます。しかし、彼等は決して恵まれた条件の中で生活している訳ではありません。それこそ、ここだけが市内で唯一残された場所だからというように感じられます。

どんな自然環境でも野鳥（生物）達にとって、大事でない場所はありません。しかし、敢えて二つの価値観から、大事であるという判断を下すことができます。一つは、そこが数の少なくなった貴重な鳥が生活している場所であるという場合、もう一つは、貴重な種はいないけれど、たくさん鳥達が生活している場所であるという場合、です。市内の多摩川河川敷では、特に貴重な種（例えば天然記念物として扱われているというような種）が恒常的に生息し

ている訳ではありません。この場合は、後者に相当する大仕事です。貴重な種はいないといっても、貴重になりつつある種は何種類か挙げることができます。野鳥の種類が多いということは、そのエサとなる虫や小動物や植物がたくさん存在するということです。実際、河川敷の水辺や草叢の中を歩きますと、トンボや蝶やカエルなど飽きることなく次々と姿をあらわします。野鳥を保護するという事は、単に野鳥という対象に対しての保護ではなく、野鳥の生活できる場所、つまり、生物のたくさん住める場所を保護することなのです。都市化が進み、野生生物の住める場所が年々減っていく福生市にあって、多摩川の河原を見渡せる場所に立つだけで、四季折々の鳥に接する機会を与えてくれる多摩川の河川敷は、鳥にとっても人にとってもなくてはならない場所です。そして、この河川敷の自然は、多摩川やその支流の秋川、平井川の流れを軸に、福生市域の上流、下流の部分と密接に結びついています。市内の多摩川の鳥について考えることは、もっと広い範囲の多摩川の鳥について考えることにつながります。

（さくらおか こうじ 日本野鳥の会会員 青梅市在住）

付表 福生市内の多摩川河川敷で観察された野鳥

◎カイツブリ目

カルガモ

○カイツブリ科

コガモ

カイツブリ

ヨシガモ

◎ペリカン目

オカヨシガモ

○ウ科

ヒドリガモ

○ウ科

オナガガモ

カワウ

ハシビロガモ

ホシハジロ

キンクロハジロ

◎コウノトリ目

ミコアイサ

○サギ科

ヨシゴイ

ゴイサギ

ササゴイ

アマサギ

ダイサギ

チュウサギ

コサギ

アオサギ

◎ワシタカ目

ワシタカ科

ミサゴ

トビ

オジロワシ

オオタカ

ハイタカ

ノスリ

サシバ

○ハヤブサ科

ハカブサ

マガモ

ガンカモ科

○シギ科

タゲリ

ケリ

○ホトトギス科

ホトトギス目

ホトトギス科

チョウゲンボウ

キョウジヨシギ

◎キジ目

トウネン

○キジ科

ハマシギ

コジユケイ

オバシギ

キジ

アオアシシギ

ツル目

クサシギ

◎クイナ科

タカブシギ

○クイナ科

キアシシギ

○クイナ科

イソシギ

クイナ

タシギ

ヒクイナ

○カモメ科

バン

ユリカモメ

オオバン

セグロカモメ

ウミネコ

アジサシ

コアジサシ

◎チドリ科

イカルチドリ

シロチドリ

ムナグロ

ケリ

◎ハト目

○ハト科

キジバト

カッコウ
ホトトギス

◎フクロウ目

○フクロウ科
アオバズク

◎アマツバメ目

○アマツバメ科
ハリオアマツバメ
アマツバメ

◎ブッポウソウ目

○カワセミ科
ヤマセミ
カワセミ

◎キツツキ目

○キツツキ科
コゲラ

◎スズメ目

○ヒバリ科

ヒバリ

○ツバメ科

ツバメ
イワツバメ

○セキレイ科

キセキレイ
ハクセキレイ

セグロセキレイ

タヒバリ

○ヒヨドリ科

ヒヨドリ

○モズ科

モズ

○レンジャク科

ヒレンジャク

○ヒタキ科

(ツグミ亜科)
ジョウビタキ
ノビタキ

ツグミ

(ウグイス亜科)

ウグイス

オオヨシキリ

セツカ

(ヒタキ亜科)

○シジュウカラ科

シジュウカラ

○メジロ科

メジロ

○ホオジロ科

ホオジロ

カシラダカ

アオジ

クロジ

○アトリ科

アトリ

カワラヒワ

マヒワ

イカル

シメ

○ハタオリドリ科

スズメ

○ムクドリ科

ムクドリ

○カラス科

カケス

オナガ

ハシボソガラス

ハシブトガラス